

月刊みんぱく 10月号

2024



特集

アウトドア

∞

フィールドワーク

編集長対談

辰野 勇

株式会社モンベル創業者

巻頭エッセイ

津村 記久子

みんぱくの民^{たみ}

津村 記久子

小説家

プロフィール
1978年大阪府生まれ。2005年「マンイーター」(改題「君は永遠にそいつらより若い」[筑摩書房])で太宰治賞を受賞してデビュー。09年「ボトスライムの舟」で芥川賞、13年「給水塔と亀」で川端康成文学賞、17年「浮遊霊ブラジル」(文藝春秋)で紫式部文学賞、20年翻訳された「給水塔と亀」でPEN/ロバート・J・ダウ新人作家短編小説賞、23年「水車小屋のネネ」(毎日新聞出版)で谷崎潤一郎賞を受賞する。最新刊は『うそコンシェルジュ』(新潮社)

これまで二回ほど、みんぱくに行こうとして行けなかったことがある。一回は、休館日なのを忘れて御堂筋線の千里中央駅まで行ってしまつて、モノレールの改札に入る直前に思い出し、二回目は、大雨でモノレールが停止して、やはり千里中央で足止めになった。休館日の時は、御堂筋線とモノレールの間にあるあらゆる施設を隈なく見て回り、書評の仕事をするための本を買つてずっと読んでいた。千里中央駅の周辺を取り巻くさまざまな建物につながるデッキの複雑さ、上がつては下がるような地形、バルコニーが上へと続くガレリアや、地下鉄の駅の天井が吹き抜けになつていて飲食店が続いている様子などは京阪神の他の場所にはなかなかない独特なものだ。

大雨の時は、カフェに入ってやっぱりずっと本を読んでいた。カフェオレやお菓子を買い足しながら、四時間ぐらい読んでいたと思う。いずれも、幸福な時間だった。仕事のために買った本のことはまだしも、大雨の日に読んでいた本の内容はほとんど記憶にないくらいなのだが、それでも幸せだった。

もちろん、休館日や大雨ではないみんぱく行きが望ましい。本館展示も特別展も、プライベートと仕事で併せて年にだいたい二回は行っている。直近で行ったのが特別展「日本の仮面」で、ままとメンドンに魅了されて映画会も見に行った。特別展には、「本当に

自分は、この主題のことを知りたいんだらうか?」と思いがちに行くこともあるのだが、必ず何かを持ち帰ってくる。特別展「復興を支える地域の文化——3・11から10年」も本当に良かった。漁船の上で神楽を踊る、名前もわからない人々の様子は、その年に見たものとも印象に残っている映像の一つだ。コロナ禍二年目のただ中に開催された特別展「ユニバーサル・ミュージアム——さわる! 触! の大博覧会」では、すべての展示物にさわるといふ能動的な経験をした。アルコールのディスプレイが非常に近い距離ごとに設置されていて大変だろうと思つたのだが、それでもさわりたいみんぱくの心意気に敬服した。

自分にとつてみんぱくの「みん」とは「民衆」の「みん」でもある。著名な何かから、権力の上からもたらされるものではなく、民衆や市民が勝手にやってきたこと、力強さと個性を毎回思い知る。見えてくるものは、異形の感触を持った「普通の人生」だ。勇気を与えられたような気分になる。

何にも興味が持たなくて、声の大きな人たちがみんな馬鹿に見える、誰とも話したくない、みたいな行き詰まった気分になつたらみんぱくに行こう。誰も何も語りかけてこないのに、展示物を通して誰かが確かに懸命に生きていた痕跡がわかる。そうすると、こんな気持ちで生きられたら、と思えるようになるのだ。

月刊 みんぱく

2024年10月号

表紙

アイガー北壁ヒンターシュトイサー・トラバースの難所で振り子トラバース中の辰野勇さん。21歳で当時の世界最年少登攀(とうはん)記録を達成。当時の様子を写した唯一の写真(スイス、1969年、株式会社モンペル提供)

*本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

- 巻頭エッセイ
みんぱくの民
津村 記久子
特集 **アウトドア ∞ フィールドワーク**
- 編集長対談**
ゲスト 辰野 勇 株式会社モンペル創業者、冒険家
- 拝見! フィールドワークひみつ道具**
岡田 恵美 関雄二 野林 厚志 樫永 真佐夫
- 特別寄稿 **南極地域観測隊レポート 究極のアウトドア、もしくはインドア?**
木下 千恵
- みんぱく回覧板
- 押しコシ図鑑
南国の祭りに咲く花
鈴木 昂太
- もっと、みんぱく
みんぱく秘伝! の資料点検法
園田 直子
- 世界の「乗っちゃえ!」
車を動かすのは誰?
田口 陽子
- だって調査だもの
フィールドワークってなによ!
議員 日月 ※ウェブサイトでは非掲載しています。
- ぱくっ! とフィルめし
「母親」になった日
磯部 美里
- 今月号の地図・編集後記

アウトドア ∞ フィールドワーク

編集長対談

辰野勇さんは
日本のアウトドア活動を牽引してきて
まもなく50年
その経験の蓄積の山へと分け入り
フィールドワーク
そこにあったのは生きる力
創造性あふれる世界
人という存在

ゲスト
たつの いさむ
辰野 勇
株式会社モンベル創業者
冒険家



かしなが まさお
樫永 真佐夫
民博 教授
月刊みんぱく 編集長

「ときには命がけというか、一生懸命、頂上を目指して登る。誰かにやれって言われたってできない」

たいに努力できない人間は、結局は好きなことをやっている。例えば会社を作って、売り上げを何千億にすることを目的にしている。日々やっていることが楽しいから、やっていることで満足している。

山登りも一緒です。結局、あれだけ大変なことを、ときには命がけというか、自分は命をかけてると思っ
てないんですけど、リスクの高いことをやるなかで、例えば重いリュックサックを担いで雪道を一生懸命、頂上を目指して登る。この行為そのものは、誰かにやれって言われたってできない。お金これだけ積むから行ってこいって言われたってね。

でも、努力できない人なりに活路がどこかにあって、好きなことなら
できるわけですよ。モンベルは大きな会社に成長しましたが、結果であって、それが目的だったわけじゃないんです。好きなことをずっと積み重ねてきた結果、いろんなものが自分のなかに蓄積してくる。
清風学園の平岡龍人理事長が、勉強のできる生徒には共通点があると



50年ぶりにマッターホルンを登頂した辰野勇さん(スイス、2019年、株式会社モンベル提供)

おっしゃっている。どんな共通点か
というところ、集中力、持続力と判断力。でもじつは、その三つを身に付ける方法は無限にあって、勉強もそのうちのひとつだと。僕は山登りという世界のなかで、集中力とか持続力とか判断力とかいう生きる力を身に付けてきたんじゃないかな。
樫永 わたしは若いときからずっとボクシングをやっています。

樫永 今日ではみんなく創設50周年記念として、モンベルの創業者で冒険家でもある辰野勇さんと対談させていただきます。

辰野 モンベルは来年50周年です。樫永 一九七五年にモンベルを創業され、辰野さんは日本のアウトドア活動を人生かけて牽引してこられた。そんな方から直接お話を伺える貴重な機会にワクワクしています。

わたしは文化人類学が専門で、ベトナムのラオス国境に近いところでフィールドワークをしてきたんですけれど、今日はアウトドアの代名詞、辰野さんをフィールドワークさせていただきます(笑)。

入試に行かず、いざ西穂高

辰野 みんなくとの共通点というか、関西そして日本の文化人類学という学問の切り口にも通じると思うんですけど、いわゆる冒険、探検とかの分野で京都大学は当時も今もそうですけど、先進的な活動をされていますよね。

樫永 今西錦司さんやみんなく初代館長の梅棹忠夫さんは、志を同じくする京都大学などのOBによって結成された京都大学学士山岳会(AACK)の会員でした。
辰野 僕も高校生のころ、京都大学

辰野 ボクシングってポクシング?

樫永 はい、そうですね。指導者たちがよく言うのは、勉強できる子はポクシングもできる。努力の仕方がわかっているから、いろいろ言わなくても自分でどんどん考えてやっていくんだと。

辰野 勉強できるっていうのは結果だと思っ
ていうんですけど、勉強の世界でもポクシングの世界でも、努力せんでも努力できる人ということなかも
もしれない。

人と比べない人生の美学

樫永 大学受験せずに登山に行っちゃったお話で、辰野さんご自身もそうですけど、辰野さんを支える環境も素晴らしいなと。

辰野 僕が生まれた昭和二〇年代、終戦直後じゃないですか。日本の社会そのものが混乱していた時期で、価値観がね、今まで信じたことがど

に憧れていたんですからね。とても入れそうもないから、大学に行くのはやめて、そのまま山登りの世界に入っただけです。今年七七歳になりまして、長いこと生きてるといえるん
なことがありますね。現在、京都大学の特任教授をしています。

樫永 辰野さんのご著書で印象に残った話がありました。信州大学に受験に行くこととして西穂高に登って、それがその後のいわば辰野さんの人生の方向性を決めたそうですね。

辰野 脳科学者の中野信子さんがおもしろいことをおっしゃっていました。努力できる人と努力できない人は、生まれながらにして決められてると。そもそも努力できる人は、逆説的な言い方ですが、努力せんでも努力できるわけです。努力できない人はね、一生懸命努力しても努力できないんです。僕みたいにね。

辰野 いや、本当にできないんです(笑)。大学の受験勉強もそうでした。目標をもって努力できる人を羨ましいなと思っ
て見ていたんです。努力できる人っていろいろの成果を求めます。結果を手に入れるために努力する。でも不幸なことにそれが達成できなかったとき、自分を責めたり、他人を責めたりする。逆に僕み

ろつと変わってしまうわけですから、もう何でもありみたいな世界で。ポクシングじゃないけど喧嘩に強くなるために、兄貴は空手をやって、僕も柔道をやりました。いわゆる高等教育っての一切関係のない家庭で、それでも生きてこれた。

だから僕は「大学に行かんよ」って言ったときに、父親が「そうか、勉強せんかったら榮やろ」って言うてくれて。「どうするんや」って聞かれたから「働く」と。じつはそのときもちゃんと就職先を決めてた。ただね、僕は大学に行かなかったのは、勉強できなかったからという
ことがいざばん大きな理由なんです。大卒という肩書きを得るためだけの大学なら頑張れば入れたかもしれない。でも、僕は京都大学に入
り
た
か
っ
た。

日本の社会は学歴社会で、どこの大学を出たかというのが一生ついて回るわけです。ある意味大きなコンプレックスをもっていた。あえて肩書きを一切もたない方がいいと思っ
た。これは自分なりの人生の美学です。

山登りも一緒。アイガー北壁に登った。人と比べられたくない。比べられる社会では、負けるに決まっていますからあえて争わない。刃を交

(注2)1ペール……綿花、羊毛等の包装単位で産出国によって異なるが、米綿だと500ポンド(1ポンド=約454グラム)

(注1)クリーンクライミング……パタゴニア創業者イヴォン・シュイナードが1970年代に提唱した、岩を傷つけないロッククライミングの考え方

「少数民族のところは特に空白が多い。
一人でかけっこして一番になるのがいいと(笑)」

えない。宮本武蔵の心境ですよ(笑)。
榎永 わたしもベトナムに行くことにしたのが九〇年代半ば。なぜベトナムにしたかというのと、古典的な文化人類学に対する憧れがあったからです。大量消費社会から隔離された、いわゆる未開社会かな、自給自足の村に単独で入って、長期間そこで寝食をともしして、内側からその人びとの考え方を学んでいく。そんなフィールドワークができるのはベトナムだと。なにしろ戦争で先行研究が少ない。少数民族のところは特に空白が多い。一人でかけっこして一番になるのがいいと(笑)。

辰野 それは、探検とか冒険とは何かという話にもつながります。僕らの時代はまだまだ未踏峰、誰にも登られてない山も誰にも登られてない岩壁もたくさんあった。そんななかで登山のいちばん大きな要素は、どれだけ技術を高めるか以前の問題として、どここの山に登るのかというプランですね。先生の場合はベトナムという道を選ばれた。人が登ったところ、そこを何分早く登るかということじゃなくて、誰も登っていない

ところに足跡を残すことに価値を求めた。それは探検も冒険も一緒やと思うね。先に見えてくる未知の世界を見てみたいという好奇心。

これは大学に行かなかった話とも根底のところにつながってる。自分の価値観とか。ちょっとキザな言い方をすると人生の美学、生きる美学、自分はこう生きたいみたいなの……。それは人の真似をすることではない。ちよつとカッコ良すぎますかね(笑)。
榎永 カッコいいです(笑)。

引き算が始まる

榎永 もうひとつ辰野さんのお話で、すごく好きな話があるんです。高校一年生のときにアイガー北壁登攀記のハイインリヒ・ハラー著『白い蜘蛛』に感動し、水平の畳を垂直の壁に見立ててハーケンを突き立てて登る練習をされたって……最高です、そのシャドーボクシング！ あり合わせのもので挑戦する精神が、辰野さんのその後のもの作りへの関心につながってるんですね。
文化人類学者も現地で、あり合わせのものでやっていくしかない。

辰野 実際に体験するのがいちばんですけど、それが無理ならあり合わせのものを活用する。畳にハーケンを突き刺してイメージするってのもそれ。

当時は装備も劣悪なものしかなかったんです。僕が始めたころはロープも麻のを使っていましたから。麻のロープなんてね、冬ちよつと雪で湿って凍ったら棒のようです。当然強度も落ちる。粗末なものしかなかったから、自分で工夫するしかなかった。しかし、山に登るために工夫をして、あり合わせのもので調達していくということが、できる人できない人がいる。

榎永 そのとおりですね。
辰野 一方で、ちよつとモンベルができた一九七〇年代の初頭から、登山の形態が少し変わってきたんですよ。限られた山しかないし、限られた岩壁しかない。これがほぼ登り尽くされたときに、人びとはどこに向かっていくか。すると今度は引き算が始まる。
榎永 引き算ですか？
辰野 要するにできるだけ道具を使わずに山に登る。誰も登っていないかったら、道具を使おうが何しようが頂上に立つことが目的だったけど、それが達成されたときに、今度は道

に引き算がある。

フッ素化合物は水を弾く力をもっているけど、環境への影響が取り沙汰されてきた。今我々はフッ素を使わない雨具を作ることに挑戦しているんですけど、値段が少し高くなるし、性能も落ちる。それでもあえて環境のためにそちらを選ぶ。だんだんそういう時代にシフトしていくんちゃうかな。

榎永 環境のための引き算ですね。
ダクロンとの出会い

榎永 辰野さんがもの作りを始めたきっかけを伺いたのですが。
辰野 僕は大学に行かず、就職したわけです。スポーツ用品の小売店に入って、登山用具というものを身近に扱うことで勉強しました。

その後、アイガー北壁を登って。ちよつとした意見の違いで会社を辞めることに。新婚旅行から帰って三日目ですよ(笑)。

辞めた後、行くところなくて。お店にいつも来ていただいていたお客様が一人が昭和産業という商社の大阪の支店長。あいさつに行ったら、「お

「ちよつとした意見の違いで会社を辞めることに。
新婚旅行から帰って三日目ですよ(笑)」

前うちに来んか」と。入社すると、繊維産業資材部という、繊維を扱う部署だった。そこで、ケブラーとかノーマックスとか、今まで見たことのないような先進的な化学繊維と出会うんです。
榎永 ケブラー？
辰野 防弾チョッキに使われる繊維です。ノーマックスというのは、消防服に使う。燃えないんですよ。そうか、これを使ったら



ダクロンスリーピングバッグ (1975年開発、株式会社モンベル提供)

今までの登山用具のような、濡れたらバリバリになって凍るような装備を刷新できるなと思った。二八歳で独立するとき、この繊維を使つてももの作りをしたらおもしろいよ。
榎永 山岳部で活動していた人たちが、モンベル初期のダクロンスリーピングバッグは革新的な製品だったと言ってます。綿打ちしにくい素材で寝袋をどうしようかという素材が。そこに日本の和布団の技術が

「自分たちが欲しいものを作ったら、
ユーザーも求めているものだった」

応用されていると伺いました。
辰野 アメリカのデュボン社っていう大きな会社が開発したポリエステル、ダクロン・ホロフィルIIという素材です。これをその先輩から紹介された。一ペール(注2)何百キロもある、ひと塊の原綿を輸入し、布団工場にもって行った。

当時、ダウンが高級で化繊なんてかさばるし重いし、安物という感じだった。でもこのダクロンというのは小さくなって、ぐつと膨らむ。スルスル滑る。おまけに中空なので、空気がたくさん閉じ込められている。これを布団を作るみたいに広げて打って手作業で寝袋を作り、それが最初に当たった。自分たちが欲しいものを作ったら、ユーザーも求めているものだった。一気に広がっていきました。

五〜一〇人のちいさな会社にアメリカのデュボン社が、この分野にお



アイガー北壁で振り子トラバース中の辰野勇さん。水平方向への移動のため、上部で支点を作り、ロープでぶら下がって、振り子の要領で移動する(スイス、1969年、株式会社モンベル提供)



創業5年目、モンベルのオールスタッフ(モンベル本社、1980年、株式会社モンベル提供)

「南極観測や、日本の冒険史みたいなのもね。広い意味で見たとき、文化人類学の範疇だと思っんですよ」

辰野 コロラド州ボルダーにモンベルアメリカがあつて、一五年ぶりに六月アメリカに行ったんです。ある人の紹介でアルパイン・クラブのミュージアムに行くと、辰野が来るということ、僕にかかわる資料を全部並べてくれていた。『岳人』もいっぱい並んでいる。それから『白い蜘蛛』。モンベルが作ったリユック

登山史のミュージアムを

辰野 今紙物をどういうふうに維持していくか、いろいろ課題がありますね。
櫻永 もし『月刊みんぱく』をウェブ雑誌にしてしまうと、一時だけ消費される情報に堕してしまふ。読み物として味わってもらいたい。
辰野 友の会会員の皆さんに送っているんですか？
櫻永 毎月会員の方に発送しています。梅棹先生がスミソニアン博物館などのアソシエイトを視察して、日本にミュージアムの友の会制度を取り入れました。
辰野 今紙物をどういうふうに維持していくか、いろいろ課題がありますね。
櫻永 もし『月刊みんぱく』をウェブ雑誌にしてしまふと、一時だけ消費される情報に堕してしまふ。読み物として味わってもらいたい。

広い意味で見たとき、文化人類学の範疇だと思っんですよ」

モンベルが来年五〇周年を迎えるにあたって、いざれ創業者がたどってきた道をどっかに残していくミュージアムみたいなものを作りたいなと思っています。



モンベルアメリカ第1号店 ボルダーストア (コロラド州、2012年、株式会社モンベル提供)



山岳雑誌『岳人』2023年2月号

「『岳人』を引き受けます」
櫻永 一時廃刊の危機にあつた山岳雑誌『岳人』の発行を、モンベルが引き受けて出版しておられます。辰野さんが山登りの道に入られたきっかけが『白い蜘蛛』という本だったということとつながっていますか？
辰野 それはね、こういうことです。どの山に登るかということが、登山家の僕がいちばん存在価値を示せるものだった。例えばひとつの岩壁があつて、そこは他の人に登られていたとしたら、あらたな別のルートから登れないかと考える。白いキャンパスに絵を書くようなもんですわ。こういうラインを作つたら美しいとか、素晴らしいラインだとか。マニアックな世界ですけど、やり遂げたときに、それを発表する場が『岳人』だったんですよ。
櫻永 なるほど。

辰野 そういう記録速報のコーナーが『岳人』にはあつて、そこに投稿したら掲載してもらえちゃいますよ。例えば「辰野ルート」とかいって。どれだけ素晴らしいラインを作つたとしても、発表しなければ自己満足で終わっちゃう。その知らせる方法が『岳人』だった。そんな媒体がなくなるとするのは、自分にとって卒業した小学校が廃校になるように寂しかった。
櫻永 それはたまにないですね。
辰野 今から一〇年ぐらい前、中日新聞の取締役が『岳人』を休刊にするといさつに来られたとき「うちで引き受けます」と、その場で間髪を入れず言いました。もう衝動的に『岳人』をなくすぐらいならと。文化人類学でもそうでしょうけど、いろんな研究してもそれを発表して誰かに伝えなければ意味がないじゃないですか。
櫻永 まさに『月刊みんぱく』ですね。もちろん研究者の業績は論文発表ですけど、『月刊みんぱく』だとデジタルと短いエッセイで「自分はこの研究をやっています」と名刺がわりに示せます。市民の支えなくしてみんぱくの存続はないという梅棹先生の考えで、開館当初から発行されてきた。こんな市民向け広



かしなが まさお
櫻永 真佐夫
 民博 教授

村によくいたおっちゃん風コーデで徘徊



ベトナム、黒タイ族の村でバアちゃんが仕立ててくれた着上は綿から完全手作り。ネエヤン手織りの綾織りバッグを肩から提げ、フィールドノート、ボールペン、自作黒タイ語ノート、カメラを濡れないように携帯。

プタを解体するモン家族と (ベトナム、2000年)



のばやしあつし
野林 厚志
 民博 教授



iPhoneひとつあればいい!?



バックバックから道具をとりだすタイミングをはかる (中国 雲南省、2005年)

1990年代は、航空チケットと現金、測量用の巻尺にクリノメーター、フィルム一眼レフカメラと大量の替えのフィルムをバックバックに詰め込んでフィールドに向かいました。現在はそれらすべての小道具がスマートフォンに集約され便利ですが、電池が切れると大変です。



せき ゆうじ
関 雄二
 民博 名誉教授

遺跡発掘に焼き鳥の串が欠かせない!?



日本の調理器具や園芸道具類の種類は世界でもトップクラスです。焼き鳥の串、蟹の身をとるスプーン、サボテンの根切り、歯科医が使う器具などは、埋葬された人骨や副葬品を傷つけないで掘るには最適です。

発掘作業の様子 (ペルー、2022年)



拝見！フィールドワークひみつ道具



おかだ えみ
岡田 恵美
 民博 准教授

楽器と歌で心の垣根をとっばらう!?



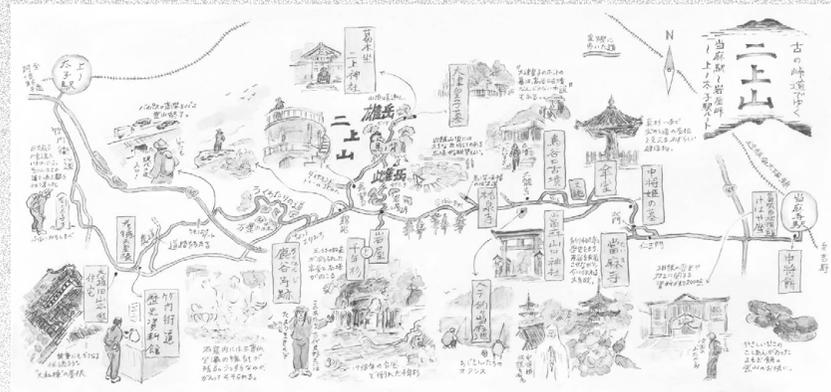
インド北東部の山岳地帯は、日常に息づいたポリフォニーの宝庫。「村の歌を聴かせてください」と言っても、恥ずかしがる山の人びと。「ではわたしがまず一曲」と三線を片手に沖縄民謡を歌うと、そこから交流がはじまります。

楽器をもつナガの小学生 (インド、2015年)



三線(さんしん)

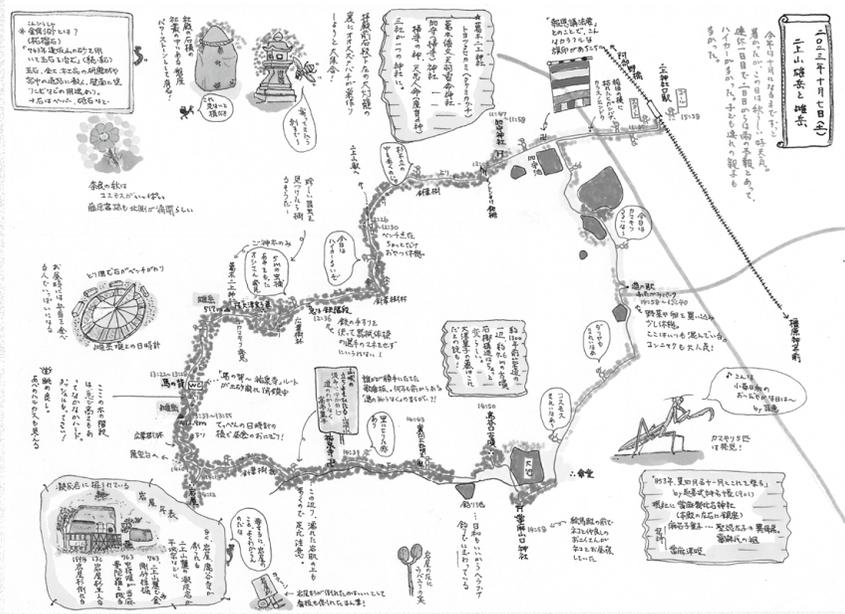
古の峠道でゆく二上山(2023年)©伊藤ミサ
出典:『岳人』2023年2月号56-57頁



二上山雄岳と雌岳(2023年)
©Masao Kashinaga

う山の世界が見えてきた。
元々日本の山登りというのは、山の神がいるから尊いという信仰から始まった。一方、ヨーロッパの山つてのは、悪魔が住んでいる。だから征服するという表現をするわけですよ。
自然に対する日本人のもっている感性のルーツが宗教につながる。

がのかわからないけど、ヨーロッパの人と根本的に違うことにあまり気づいてない。「登山」で一括りにしてしまってるから。
山そのままを感じる
榎永 わたしも溪流釣りで少しは山に入るんですが、山が好き理由は



たんですよ。そのときインタープリター(注3)が説明してくれるわけ。この木は樹齢何百年とか……。最初のうちは素直に聞いていたけど、だんだん面倒くさくなってきて(笑)。
榎永 わかります(笑)。
辰野 「ちょっとおしゃべりをやめませんか? 倒木の上に腰を下ろし

たどっていくと、柳田國男の『遠野物語』にあるような世界への憧れかな。そういう感性への刺激もアウトドア教育のひとつかもしれません。
辰野 その山のもつ歴史とか文化みたいな背景を理解して行くのと、まったく何もなくて行くのでは山の見え方が変わりますね。
ところね、国立公園に編入されるかどうかで、環境省の人が森吉山を案内してくれ

て、鳥のさえずりを聞いてみませんか。五分間ぐらい。そしたらね、シーンとして。世界が変わるわけです。涙が流れますよ。
説明の必要部分と説明のいらない部分があるということも大切です。感じるっていう。それこそ生物学者の福岡伸一さんのいうロゴスとピュシスとかそうですね。物事を文字であらわす、ことばとして表現することの大切さ!
榎永 みんなの展示も、説明は最小限にして、モノをして語らしめるのが本来のコンセプトです(笑)。
辰野 説明を理解したうえで、ただ行んで自然を感じるというのもある。ただその場で感じるというのもある。どちらが良いとか悪いとかじゃなくて、受け止める側それぞれ。
もの作りもそうですけど、供給側の論理で進めていくと、大抵間違ってしまう。やっぱりお客様の立場でのことを考えることが大切だと思いますね。
榎永 研究者は習性として自分の論理でばかりペラペラ語りたがるので身につまされる思いです。貴重なお話、ありがとうございました。

(注3)インタープリター……自然公園を拠点として、自然のなかで旅行者などに自然や歴史、文化を案内・解説する人



1975年5月16日、エベレスト頂上に立つ田部井淳子さん。世界初の女性エベレスト登頂を達成 ©一般社団法人 田部井淳子基金

榎永 登山も冒険もたくさんの人と社会が介在して成立しますもんね。
辰野 『岳人』っていうのはね、岳と書いてあるけどその下に人がある。すなわち山だけじゃないんですよ。人がいて初めて山は完成する。
僕はアルパイン・クラブに行って、資料を残すことの重要性を痛感したわけです。冒険で創業者の辰野と話す機会はなかなかないとおっしゃっていたんだけど、あと何年かしたらもっとなくなりますが、何十年かしたら僕も伝説の一人です。積み立てていかなないと消えていくわけです。

来年二〇二五年、福島県の三春町にモンベルのお店を作るんです。何にもないところにポツンとできるんですよ。それを決意したのは、地元
の要請があったことと、世界で初めて女性としてエベレストに登った田部井淳子さんの生まれた場所だったからです。
榎永 そうなんですわね!
辰野 日本ではほとんど知られてない。生きているときはそんなもんですよ。モンベルの横に田部井淳子記念館を作ることになりました。
一九九九年、イタリア山岳会に田部井さんと僕が招待されて、並み居る世界中の一〇〇人のレジェンドと一緒にミラノの街をパレードしたご縁もあってね。田部井さんの偉業は三春町の人はもちろん知ってる。ところが遺品が農機の横にボンと置かれていたような状態でした。
記念館というのは、一度行ったら二度と行かないかもしれない。だから、そこを拠点に冒険塾をやるとか、子どもたちを集めてそのスピリッツを伝えるようなイベントを考えたい。展示だけでは一回見たら終わりです。あとは継続したプロモーションと活動が大事です。
榎永 情報発信の方法は多様化していますしね。
辰野 みんなよくとモン

アウトドアのかたちはさまざま、「楽しかった」で終わるのじゃなくて、それが次の創造に結び付いたら楽しい。みんなでもフィールドワークを経験できるワークショップをしたり、民族学研修の旅をしたりしていますが、アウトドア教育について伺えないでしょうか。
辰野 先ほどどちらかというところ、アイ

ベルのコラボ、例えばみんなの展示場に山岳史コーナーがあればモンベルとリンクしますよ。チベットのしてもネパールにしても。辺境の地には必ず山がありますから。
イラストマップを描く
榎永 『岳人』二〇二三年二月号を読んでいて、この二上山のイラストマップが素晴らしいなと。わたしも二上山に何度か歩きに行っていて、二上山のイラストマップを何枚も描いています。
辰野 マメですね(笑)。
榎永 (イラストマップを示しながら)フィールドワーカーってこういう地図をチョコチョコと描いたりして創造するわけです。ここで『岳人』が自分の登頂ルートを発表する場だったという登山家のお話とわたしのなかでつながりました。
アウトドアの私たちはさまざまで、「楽しかった」で終わるのじゃなくて、それが次の創造に結び付いたら楽しい。みんなでもフィールドワークを経験できるワークショップをしたり、民族学研修の旅をしたりしていますが、アウトドア教育について伺えないでしょうか。
辰野 先ほどどちらかというところ、アイ



ドリルで穴を開け、横笛を自作する辰野勇さん。山に入り自然のなかで演奏することもある(大阪市 株式会社モンベル本社、2024年)

究極のアウトドア、もしくははインドア？

南極は遠い

宇宙よりも遠い……ともいわれる南極。日本は六〇年以上、ほぼ毎年、南極地域観測隊を送り、南極観測をおこなっている。わたしはもともと国立民族学博物館の事務職員だったが、機会をいただき、第六五次南極地域観測隊の庶務隊員として、二〇二三年一月から二〇二四年三月まで南極で活動をしてきた。

木下千恵きのしたちさと
国立極地研究所職員



南極観測隊は南半球の夏期間のみ南極に滞在する「夏隊」と、一年をとおして南極に滞在する「越冬隊」に分かれている。夏隊の約四カ月の活動期間のうち、昭和基地付近で活動するのは一カ月半ほど。それ以外の期間は海上自衛隊が運航する南極観測船「しらせ」での航海となる。

医者や料理人も土木作業

夏の昭和基地の平均気温は約マイナス一七度。多くの人が想像するだろう雪や氷に覆われた南極とは異なり、工事現場のような場所だ。作業がしやすいように除雪され、トラックが行き交い、重機が忙しく動く。屋外に出る際は安全のため、必ずヘルメットを着用し、日差しが強いため、サンングラスをかけて極力肌を出さない。恰好で作業をする。六五次では新しい宿舎の建設作業があり、これまで建設作業の経験がない医者や料理人、研究者、またわたし自身も、宿舎の基礎部分の鉄筋結束やコンクリートを作る作業に携わった。南極では、数人の専門家と多数の素人で建物を建てるのだ。ほかにも人手が必要な作業がある場合は、自身の専門分野にかかわらず協力する。その場にいる人間だけで基地機能を維持し、自分たちの生活を成り立たせなければならないのだ。

ブリザード襲来

もちろん、夏期間の活動場所は昭和基地だけではない。雪や氷に覆われた内陸部や、氷床から岩が露出している露岩域といった「野外」での観測も活発におこなわれている。野外にはおもにヘリで移動し、日帰りまたは野営をしながら観測をおこなう。六五次では氷河上に二週間ほど長期滞在するチームもいた。今回、わたしは昭和基地から約八〇キロメートル南の露岩域、スカールンでの観測に同行する機会があった。一泊の予定だったが、荒天

のため、迎えのヘリが飛ばず、さらに一泊することになった。南極の大自然の前では計画どおりいかないことも多々あるため、野外で活動する際はこのように帰還できない事態に備え、必ず予備食や非常食を準備する。このときも予備食を持参していたため、困ることはなかった。大自然の脅威といえ、すぐに思い出すのがブリザードだろう。数メートル先



越冬隊との別れのとき
(南極 東オングル島、2024年)

も見えなくなる猛吹雪。昭和基地ではブリザードにより外出制限令が発令されると、基本的には建物間の移動は禁止となり、雪で閉ざされた建物内で過ごすことを余儀なくされる。六五次では比較的天候のよい夏期間にもブリザードが襲来し外出できない日があったが、休みなく屋外作業をしていたわたしたちにとってはつかの間の休日となった。極寒、強風、極夜、また文明圏からの隔絶など、南極という厳しい環境での生活は究極のアウトドアであると同時に、究極のインドアなのかもしれない。

第65次南極地域観測隊（本隊）

真隊 2023年11月24日～2024年3月21日

- 2023年11月24日 羽田空港にて出発式。オーストラリア パース空港へ出発
- 25日 フリーマントル港にて南極観測船「しらせ」に乗船
- 30日 「しらせ」フリーマントル港を出港
- 12月5日 南緯55度、「しらせ」南極海（南大洋）に到達。氷山初視認
- 14日 「しらせ」流氷域に進入
- 20日 65次隊本隊、昭和基地に到着。夏期オペレーション開始
- 25日 「しらせ」昭和基地沖に接岸
- 2024年1月1日 昭和基地にて白夜の新年を迎える
- 26日 「しらせ」昭和基地沖の定着氷より離岸。海域調査へ
- 2月1日 越冬隊交代式
- 11日 65次夏隊、夏期オペレーション終了。昭和基地から「しらせ」へ
- 12日 「しらせ」昭和基地沖を離岸。復路へ
- 3月18日 オーストラリアフリーマントル港に入港
- 20日 パース空港から日本へ向けて出発
- 21日 帰国



上：居住カプスを拠点に周辺にテントを張り、野営した（南極大陸 スカールン、2024年）
下：野外でペンギンの観測をおこなうチームも（南極大陸 袋浦、2024年）

みんなく 回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんなくホームページ
催し物のご案内
<https://www.minpaku.ac.jp/event/>



各イベントについて、詳しくはホームページをご覧ください。

みんなく創設50周年記念特別展

吟遊詩人の世界
会期 12月10日(火)まで
会場 特別展示館
■関連イベント
みんなく映画会 映像人類学フォーラム
「吟遊詩人をめぐる映像民族誌の視点——エチオピアとネパールの比較から」
日時 10月26日(土)13時～17時
(12時30分開場)
会場 本館2階第7セミナー室
(定員30名)
上映作品 「アズマリ——声の響宴」
(2023年)、「カトマンドウのサーランギ奏者たち」(みんなく映像民族誌第35集、2019年)
【申込期間】
▼一般受付 10月23日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。
みんなく映画会
音楽ドキュメンタリー「The Path——バルパティ・パウルの歌と観智」
日時 11月23日(土)祝 13時30分～

みんなく創設50周年記念企画展

客家と日本
——華僑華人がつむぐ、もうひとつの東アジア関係史
会期 12月3日(火)まで
会場 本館企画展示場
みんなくインテリジェントホール(講堂)(定員350名)
上映作品 「The Path——バルパティ・パウルの歌と観智」(2019年)
参加費 要展示観覧券(一般580円、特別展をご覧になる場合は一般880円)
※イベント参加費は不要
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日12時30分から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場整理券を配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。
【申込期間】
▼友の会先行受付
10月11日(金)～18日(金) 定員70名
お申し込み先
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
▼一般受付
10月21日(月)～11月20日(水)



客家の服飾



「The Path——バルパティ・パウルの風狂の歌と観智」より

みんなくミュージアムハートナイス

点字体験ワークショップ
日時 10月12日(土)、11月9日(土)
12時～15時30分最終受付15時
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付
公開フォーラム
世界の博物館2024
9カ国・地域、9名の博物館専門家が所属する博物館の活動や課題を報告しながら、互いに問題点を共有し、検討します。

番組番号	タイトル
7256	ラロンを探して——現代に息づく吟遊行者パウルの歌と観智
7257	絵語りポトウアとして生きる

監修 岡田恵美(本館 准教授)

ビデオテーク新番組

みんなくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

会場 本館展示場(ナビひろば)
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、要展示観覧券(一般580円、イベント参加費は不要)
10月6日(日)14時～14時45分
警女(さげ)の「サウンド・スケール」
——音で知る、音に委ねる、音が生きる
話者 広瀬浩二郎(本館 教授)
月岡祐紀子(警女唄、民謡、三味線弾き語り)
10月20日(日)14時～15時
ベンガルの遊行詩人
フォキル・ラロン・シャハの宗教世界
話者 外川昌彦(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 教授)
10月27日(日)14時～15時
モンゴル高原、
韻踏む詩人たちの系譜
話者 島村一平(本館 教授)

アジア太平洋地域で、サトイモと農業の起源を知るための植物学的、民族学的、遺伝学的研究をおこなってきました。この研究は、世界で広く利用されている他の植物への関心につながりました。



キプロスの畑でサトイモを収穫する母娘(1996年)

【申込期間】
▶一般受付 10月16日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。
お申し込み先
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
▶一般受付 10月21日(月)～11月13日(水)

「第17回文化財保存修復学会学術賞」を受賞
本館の日高真吾教授が、「第17回文化財保存修復学会学術賞」を授与されました。文化財保存修復学会学術賞とは文化財および文化財に関連する領域において、保存および修復の学理、修復技術およびその応用などの研究および活動をおして、文化財の保存および修復の分野の発展に特別な功労があったものに授与される賞です。
巡回展
驚異と怪異
——想像界の生きものたち
会期 11月17日(日)まで
会場 国立アイヌ民族博物館 特別展示室(北海道)
主催 国立アイヌ民族博物館、国立民族学博物館、公益財団法人千里文化財団

みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
参加無料
※事前申込制、先着順(定員320名)
※当日参加申込も可能。当日12時30分より入場整理券を配布します(定員80名)
第550回
10月19日(土)13時30分～15時(13時開場)
客家民居と日本
講師 河合洋尚(東京都立大学 准教授)
小林宏至(山口大学 准教授)
奈良雅史(本館 准教授)
【申込期間】
▶一般受付 10月16日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。
第551回
11月16日(土)13時30分～15時(13時開場)
サトイモを探り、世界を識る
講師 ピーター・マシウス(本館 教授)

友の会

講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。
お問い合わせ先 国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会講演会

参加形式：会場もしくはオンライン配信
友の会会員：無料
一般(会場参加のみ)：500円
※10月の友の会講演会は、会員は会場参加の場合、事前申込不要
※11月の友の会講演会は、会員も会場・オンライン配信ともに、事前申込制
第553回 10月5日(土)13時30分～15時
絵語りポトウアの歌世界
講師 岡田恵美(本館 准教授)
会場 本館第5セミナー室(定員70名)
第554回 11月2日(土)13時30分～15時
世界を席卷するRAPの魅力
——あなたもわたしも吟遊詩人

講師 矢野原佑史(京都大学 特任研究員)
会場 本館第5セミナー室(定員40名)
本講演では、まず現在日本でも流行中のラップ(RAP)について解説し、アフリカの口頭伝承や日本文化とのつながりにも着目し、その魅力をお伝えします。その後、特別展示館に移動し、「うたが生まれる心の小道」という展示の説明と、「あなたも吟遊詩人」という詩作体験コーナーでのワークショップをおこないます。
※講演時間内で講義と特別展示の見学をおこないます。(要会員証もしくは特別展示観覧券)
※オンライン配信は講義の時間のみとなります。

東京講演会

友の会会員：無料、一般：500円
※事前申込制、先着順(定員50名)
※オンライン配信はありません。
第138回 10月27日(日)13時30分～15時
魔女とハロウィンのはじまり
講師 河西瑛里子(本館 助教)
会場 モンベル渋谷店5階サロン
10月の渋谷といえば、ハロウィン! ハロウィンの衣装といえば、魔女! でも、そんなハロウィンのルーツと進化、気になりませんか? そしてコスプレではなく、魔女と名乗って現代を生きている人たちに、心惹かれませんか? 子どものころ、魔女になりたいかった方、衣装してみたかった方も、そこまでではなかった方もぜひ……。
【申込期間】 11月13日(水)まで
※事前申込制、先着順、参加無料
※詳細は二次元コード(QR)からご確認ください。
お問い合わせ
本館研究協力課 共同利用係
forum_symposium@minpaku.ac.jp

民族×アートの現在

——美をめぐる政治のゆくえ
今日、脱植民地化の過程でアートの再検討が進められています。本講演会では、「エスニック・アート」を手がかりに、アートと文化の政治について考えます。
日時 11月8日(金)18時30分～20時
(40分17時30分開場)
会場 松尾瑞穂(定員600名)
趣旨説明 経尾瑞穂(本館 准教授)
講演1 柳沢史明(西南学院大学 准教授)
講演2 鈴木紀(本館 教授)
パネルディスカッション
柳沢史明×鈴木紀×吉田憲
主催 国立民族学博物館
日本経済新聞社
【申込期間】 10月3日(木)～30日(水)
※事前申込制、先着順、参加無料



みんなく創設50周年記念国際シンポジウム
「フォーラム型人類文化アライズ」プロジェクト関連
デジタル人文知が作られるとき
技術とともに知識は変化します。1974年の国立民族学博物館創設から現在にいたるまでを回顧しながら、デジタル人文知とはなにかを議論し、社会における人文学の役割を提案します。
日時 11月17日(日)13時30分
会場 本館2階第4セミナー室(定員30名)
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます(定員300名)。
主催 人間文化研究機構 機関拠点型基幹研究(国立民族学博物館)
【申込期間】 11月13日(水)まで
※事前申込制、先着順、参加無料
※詳細は二次元コード(QR)からご確認ください。
お問い合わせ
本館研究協力課 国際協力係
hakukeni@minpaku.ac.jp

日時 11月2日(土)13時～16時45分
会場 本館2階第4セミナー室(定員60名)
主催 国立民族学博物館
独立行政法人国際協力機構
【申込期間】 10月24日(木)まで
※事前申込制、先着順、参加無料
※詳細は二次元コード(QR)からご確認ください。
お問い合わせ
本館研究協力課 国際協力係
hakukeni@minpaku.ac.jp

※オンラインライブ配信でもご参加いただけます。
※手話通訳あり
※詳細は二次元コード(QR)からご確認ください。
お問い合わせ先
本館研究協力課 研究協力係
06-6878-8209

祭礼(七夕踊)用 帽子

標本番号 | H0037150
地域 | 日本 鹿児島県
展示場 | 日本の文化展示場



◆ 推しコレポイント ◆

手描きの絵柄がキュート!
本体の上部には、厚紙を波状に切った装飾がつけられる。そこには、夫婦岩や朝日、富士などおめでたい吉祥文様が描かれている。
作成者ごとに違う絵柄なので、展示資料をじっくりと眺めて違いを見つけよう。



右:「市来の七夕踊」で使用される花笠
左:花笠の装飾(ともに鹿児島県、2022年)



南国の祭りに咲く花

すずき こうた 民博 助教
鈴木 昂太

色とりどりの造花で飾られた花笠は、祭礼や芸能で神聖な役割を演ずる演者の目じるしとなる。そんな全国の花笠が、日本の文化展示「祭りと芸能」セクションの一角に並べられている。そこに立つと、ひとつひとつの細工の見事さと表現の多様性に目が奪われてしまう。

「市来の七夕踊」の花笠

そのなかから、鹿児島県いちき串木野市の「市来の七夕踊」で使用される花笠を紹介する。この祭りは、大里地区の14集落による大規模な祭礼で、地区内の数カ所で数百人による踊りが奉納される。多様な踊りのうち、各集落から選出された太鼓踊りの演者が花笠を着用する。花笠は2種類あり、現在展示中の資料は、鉦打ち役が着けるもの。青年団に入る前の子どもが務めることが多く、実際に花笠を着けると長く伸びた先が地面に着きそうである。

かつては祭りの主体となる青年団が、踊り手のために花笠を作成したが、現在は有志が制作している。マダケを細く割った竹ヒゴを組み上げて、円筒状の土台を作り、細工を加えた色紙を重ね張りして、装飾していく。笠の上部では色紙や綿で花と枝葉を表現し、下部には網飾りと首紐を取り付ける。ちなみに、正面に付けられた金の丸十字は薩摩藩主島津家の家紋である。

現在展示されている花笠は、1978年に取



「七夕踊伝承会」による太鼓踊りの奉納(鹿児島県、2023年)

集された。それをわたしが調査した2022年のものと比較すると、基本的な構造は大差ないが、造花や紙色など細かい表現が異なっている。現在の人びとは、従来の形を守るだけでなく、先人から受け継いだ知識や技術を基にして自分なりに創造し続けているのだ。実際に現場へ行き、制作者の技術や思いを見聞きすることで、展示物の見方が変わる。それが研究の面白いところである。

新たな祭りの未来に向けて

ただ、残念なことに市来の七夕踊は、2022年をもって「大里七夕踊保存会」を中心とする従来の形態での開催は休止となってしまった。2023年以降は、有志が結成した「七夕踊伝承会」が太鼓踊りだけの奉納を続けている(上の写真は那时的様子)。あらたな形で祭りが復活し、再び真夏の市来にたくさんの花が咲くことを待ってやまない。

みんぱく秘伝！ の資料点検法

そのだ なおこ
園田 直子 民博 名誉教授

モノの材質と状態をコード化する

みんぱくが所蔵するモノの資料は、二〇二四年三月時点、三万六〇〇〇点にのぼる。このように膨大な数の資料を管理するためには、多様な材質や形態に対応できる方法や、ある程度の大きさや量でも運用できる方法を検討したうえで、個々のケースに応じて微調整をおこなうといった、柔軟な対応が求められる。また、日々の資料管理のすべての活動において、誰がおこなっても、何年経っても、相互に比較できるように統一したデータを残すことを心がけている。

みんぱくには、独自の資料点検法がある。専門家でなくても短期間の研修で資料点検ができるようにと、森田恒之^{もりたつねゆき}民博名誉教授(当時助教)が考案し、一九八一年から導入しているコード化した点検法である。点検結果を文字で記録すると、一〇人いれば一〇通りの表現になる。しかし、資料の材質や点検結果をあらかじめ分類し、それぞれに二ケタの番号を付けてコード化しておけば、誰が点検しても、点検結果を同じ四ケタの番号の組み合わせで記すことができる。

同じ「ものさし」でみる

あらたに収集した資料、展示・貸出など活用前後の資料の点検



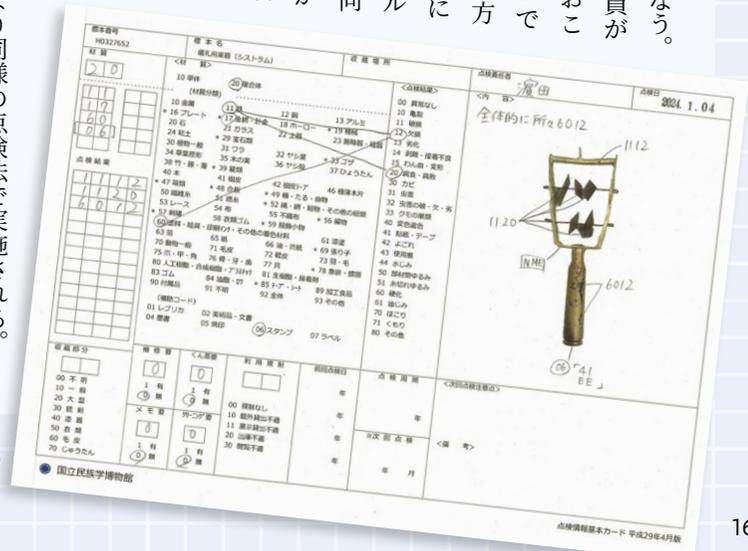
外部業者による展示場での資料点検。高所の資料の点検は足場を組んでおこなわれる(日本の文化展示場、2024年)

は、企画課標本資料係がおこなう。点検やコード選びを、先輩職員が新しく入った職員と一緒にこなうことで、同じ「ものさし」で判断できるようにする。点検方法やコードの選び方で判断に迷った場合は、点検マニュアルに記録を残すことで、将来同じような迷いが生じる事態が起こったときに同じ基準で判断できるようにしている。点検マニュアルは順次改訂されており、現在、第一二版の準備が進められている。

一方、展示資料の

点検は、外部業者により同様の点検法で実施される。また、資料点検にあわせて、ホコリの除去、資料を固定する演示具やテグスの状態確認と補修がおこなわれる。

資料の点検結果をコード化することで、長期にわたって比較可能なデータを残せるだけでなく、その履歴をコンピュータで管理することができる。毎年度、収蔵庫と展示場であわせて約五〇〇〇〇〜六〇〇〇〇点の資料が点検の対象となり、あらたなデータが、逐次、追加されている。



資料の点検カード(点検情報基本カード)の例。点検結果は、4ケタ(前半の2ケタは材質分類、後半の2ケタは点検結果)の数字で記されている

車を動かすのは誰？

インドの大都市ムンバイは乗り物であふれている。北の郊外から南の都心に毎日大量の通勤客を運び込む「ローカル・トレイン」、複雑な路線のバス、街のシンボルでもある黒と黄色のタクシーやオートリキシャ。車のあいまを荷物運ぶ自転車や手押しカートがすり抜け、歩行者たちがタイミングを見計らって手をつないで道を横切る。

鉄道かタクシーか、バイクか自家用車か。何を使って移動するのは、階層やライフステージ、そして生き方に結びついている。わたしは長らく鉄道派だったが、最近は暑さや大気汚染や人ごみで移動がづらくなり、アプリで簡単に手配できて会話も交渉も現金も必要のないウーバー(配車サービス)ばかりを使うようになってしまった。ウーバーを呼ぶと、自分の部屋から目的地まで、車の鎧で外界から守られて快適に移動できる。わたしはウーバーを使うことで、街にはさらに車

が増えて汚染されていくのだが。

家の延長で移動したいという願望の最終形態が、自家用車とお抱え運転手をもつことかもしれない。わたしの友人夫婦は、数年前に運転手を雇った。友人の夫は家から二キロほどの場所にオフィスを構えていて、自家用車での通勤には一〇分もかからない。以前は自分で運転していたのだが、子どもや両親に何かあったときのために一人キープしておくことにしたのだという。運転手のハリ(仮名)は南インドの出身で、近所のスラムから自転車を通い、朝九時から夜七時くらいまで「勤務」している。朝夕の夫の送迎がおもな仕事で、それ以外に雑用のないときは待機している。

先日、友人宅に滞在中に、夫婦がそろって帰ってきた。友人は「わたしは帰り道に夫を拾ってきた」という。聞くと、まずは自分(妻)の職場にハリに迎えに来てもらい、それか

たくちようこ
田口陽子

観音大学 准教授

ら夫の職場に寄って一緒に帰ってきたとのこと。運転手のハリではなく「わたし」が主語になっていることが印象に残った。車を動かしているのはあくまで主人としての自己であり、車も運転手も、自分の身体の延長なのだろう。



右:ムンバイのいろいろな乗り物。世界遺産のCST(旧ヴィクトリア)駅前
左:ムンバイ中心部の道路
(どちらもインド ムンバイ、2024年)

「母親」になった日

いそべ みさと
磯部 美里 国際ファッション専門職大学 准教授

2006年8月某日の昼過ぎ、わたしは中国雲南省
シーサンパンナ
西双版纳タイ族自治州のあるタイ族村落にいた。
村内の高床住居の一角で、大勢のタイ族に囲まれ
ながら、ビニール袋に入ったおこわを取り出して
は片手でキュッと握り固め、豪華な料理とともに
口に運んでいた。かつては主食であったもち米も、
タイ族の日常的な食卓からは姿を消しつつあり、
この村でも、主食はうるち米に取って代わられて
いた。普段は炊いたうるち米に肉や魚、野菜を煮
たり焼いたり炒めたりしたおかずを合わせて食
べる(ちなみにわたしの好きなおかずは豚バラと大根を
塩味でコトコトと煮込んだ一品である)。しかし、こ
の日は違った。出産後の満一月を祝う儀礼がおこ
なわれたからである。

食事の支度は早朝から始まる。豚を潰し、鶏を
絞め、主菜を作るのは男たちである。その横では、
女たちがもち米を蒸し野菜を洗う。昼前になると、
爆竹が鳴らされ、それを合図に村中から年配者が
集まってくる。正午になった。いよいよ儀礼が始まる。

中央のテーブルには塩、おこわ、茹でた鶏2羽が
準備される。机の前には母親と男児が座り、年配
者が取り囲む。元僧侶の年配男性が「祝いのこと
ば」を述べ、母親と子どもの魂がひとつになるよ
うにと願いを込めておこわに塩を付け、隣に置か
れた鶏に塗り付ける。それから、年配者が母親と
男児の両手に綿糸を巻き付けていく。儀礼をと
おして、あらたに誕生した子どもは社会に迎え入れ
られ、子を産んだ女性は母親として承認される。

儀礼が終わると食事の時間である。タイ族には

食材に火を通さず食べる「生食」の習慣があり、こ
の日は新鮮な豚肉を細かくたたき、唐辛子、ニン
ニク、生姜、ネギ、パクチー、花山椒、塩、うま味調
味料などのさまざまな香辛料や調味料を混ぜ込
んだ宴会料理の「ジンサー」が宴卓を彩った。見
た目はドロリとしているが、口に入れると舌触り
滑らかで辛みと旨みにあふれ、おこわにつけて食
べても美味しい。

当地のタイ族には、生まれた子どもに厄除け
のための義理の親をもうける慣習があり、日本と
いう遠方から来ていたわたしは大役を与えられ
た。この日、わたしもまた「母親」になったのであ
る。それから18年が経ち、その男児は成人を迎えた。

義理ではあ
るが「母親」
としてしみ
じみ思うと
ころがある。



上:宴卓に並ぶ料理とビニール袋に入ったおこわ
下:「祝いのことば」を述べているところ
(写真はどちらも中国 西双版纳タイ族自治州、2006年)

第48巻第10号通巻第565号 2024年10月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 山中由里子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 中川理 奈良雅史 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 研文社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係
にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間とおして、いつからでも始められます。



お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

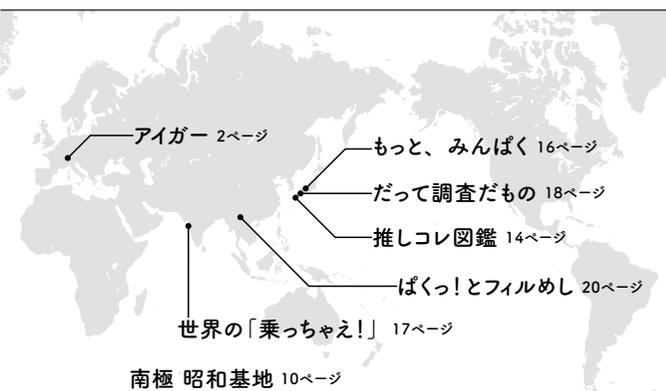
電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会

今月号の地図

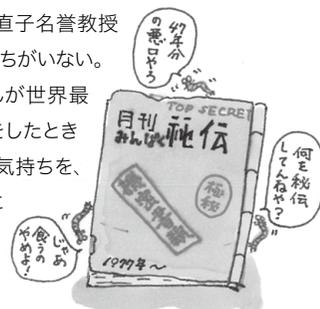


編集後記

モンベル本社を訪ねたのは6月末。対談のあと辰野さんから、鳥取から届いたばかりのスイカをご馳走になり、モンベル製「野筆」で達筆なメッセージをいただいた。締めは会長室で笛作りの実演と生演奏! 山男らしい飾らない大らかさと、きめ細かいおもてなしの心をあわせつつお人柄に感動した。対談記事にもそんな辰野さんゆえの山やアウトドアの魅力があふれている。

本号は木下千恵さんが南極観測から大自然の脅威を語り、礒貝日月さんは広島「夜の街」フィールドワークから「山の神」恐怖体験(ひよえ〜!)を告白するなど、フィールド記事も充実。園田直子名誉教授ご開帳の秘伝も博物館ファン垂涎のネタにちがいない。

表紙説明にもあるが、表紙は辰野さんが世界最年少でアイガー北壁登攀に決死の挑戦をしたときの貴重な記録写真。いつまでも挑戦する気持ちを、という思いを込めた。そろそろアウトドアに良い季節。ちいさな冒険、いかが?(樫永真佐夫)



2024年9月号1頁「目次」において誤りがありました。下記のとおり訂正いたします。

- 誤) コーナー名「もっと、みんぱく」
- 正) コーナー名「ふりりミュージアム」

次号の予告 11月号

特集「今日の縄文ism」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

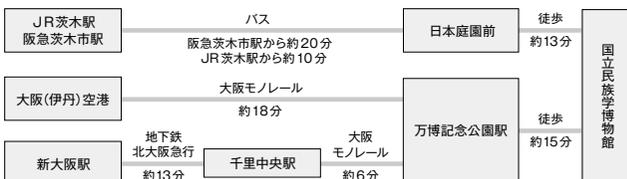
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日~1月4日)

観覧料 一般 580円/大学生 250円/高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

オリジナルグッズのご案内

みんぱく創設50周年記念のオリジナルグッズなどをご用意して、みなさまのご来館をお待ちいたしております。

ミント、黄、青、
New カラー登場!



フローティングボールペン

ペンを傾けると現地調査員が動きます。
コレクションアイテムとしても人気です。
インク: 黒、ウォーターブルー

定価 各1,240円(税込)

トーテムボールと
いつも一緒!



メッセージカードに
ボンッ!

世界のありがとうスタンプ
世界のあいさつスタンプ

世界の「ありがとう」と「こんにちは」
をスタンプにしました! 合計24種類の
ことばから、どれを選びますか?

定価 各528円(税込)



みんぱく創設50周年記念
トーテムボール薄手エコバッグ

A4の書類や雑誌がゆとりを持って入ります。
サイズ: 約33cm×40cm
(ハンドル含まず)

定価 880円(税込)



2025年国立民族学博物館オリジナルカレンダー

民具

暮らしをささえる道具たち

2025年の国立民族学博物館オリジナルカレンダーは、渋谷敬三が創設したアチック・ミュージアムのコレクションのなかから、人びとの日常の暮らしをささえてきた民具を掲載しました。長い間使用されるに適した、理にかなった美しさが宿っているモノの魅力を一年を通してお楽しみください。

サイズ: 25cm×25cm (開くとタテ50cm×ヨコ25cm)
オールカラー 28頁 中綴じ 月曜はじまり

定価 1,430円(税込)

国立民族学博物館友の会 会員価格 1,287円(税込)

◆5冊以上まとめてご購入の場合は、会員価格1冊1,144円(税込)です。

◆通信販売の場合、別途発送手数料が必要です。



お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ 10:00~17:00(水曜日定休) E-mail shop@senri-f.or.jp
オンラインショップ「World Wide Bazaar」 <https://www.senri-f.or.jp/shop/>



オンラインショップ

オンラインショップ「World Wide Bazaar」では Amazon Pay(アマゾンペイ)が使えます。

ただし、国立民族学博物館友の会会員の方の会員割引につきましては、Amazon Pay をご利用の場合は適用できませんので、あらかじめご了承ください。友の会会員割引の適用をご希望の場合は、会員番号をお知らせいただくとともに、お支払い方法を郵便振替・銀行振込を選択ください。